

ベートーヴェン：ピアノ四重奏曲 WoO.36-1

1785年、ベートーヴェンが15歳、まだ故郷ボンにいた頃にかかれた最初期の作品。この年ベートーヴェンは、ボン宮廷の第二オルガン奏者に任命され、宮仕えを始めた。ピアノ四重奏曲 WoO.36は3曲あるが、WoOとは、ドイツ語の「Werk ohne Opuszahl（作品番号なしの作品）」の略。出版はベートーヴェンの死後1828年。3曲の順番もその際に並べられたもので、ベートーヴェンが想定した順番とは異なる。全体的にモーツァルトの影響が色濃く、本曲（第1番）は構成や主題、その規模においても、とくにモーツァルトのヴァイオリン・ソナタ 長調 K.379を手本にしたのではないかとされている。

全3楽章からなり、ゆったりとした旋律が心に染みる第1楽章、ロマン主義の到来を告げる嵐のようなアレグロの第2楽章、そして終楽章は技術的にも四重奏の愉しさを味わえる主題と変奏で曲を閉じる。

フォーレ：ピアノ四重奏曲 第2番

フォーレのピアノ四重奏曲は2曲あり、この第2番は前作初演から7年後、1887年1月に初演された。作曲の経緯は不明だが、およそ1885～86年に書かれたと考えられている。この頃フォーレは40代にさしかかっていた。

第1楽章は、冒頭から情熱的な第1主題が弦のユニゾンで奏される。やがてヴィオラによって抒情的な第2主題が現れ、展開部ではさらに第3主題がヴィオラとチェロによって提示され第1主題との優しい対話を繰り返す。第2楽章は、弦のピチカートとピアノ底部の躍動的な動きに乗って、ピアノの右手が走り回り、それと掛け合うように弦がそろって歌うスケルツォ風の楽章。第3楽章では、鐘の音を模したピアノの低音が鳴り響き、続いてヴィオラが無伴奏で回想するような旋律を奏する。この楽章にはフォーレの望郷の念が表れていると言われる。第4楽章は3連符と付点音符が組み合わされた特徴的な第1主題で始まる。やがて響きわたるピアノの和音を経て、ヴィオラとチェロによる第2主題の息の長い旋律が続き、主題後半はヴァイオリンが可憐な旋律を歌う。冒頭楽章と呼応するような、充実したフィナーレとなっている。

ブラームス：ピアノ四重奏曲 第2番

1862年10月に書き上げられ、初演は同年11月29日、ウィーンでブラームスのピアノとヘルメスベルガー四重奏団のメンバーによって行なわれた。意欲的な構成を持つ《第1番》に比べて、オーソドックスかつ明朗な本作の演奏機会はあまり多くないが、ブラームスの生前は、3曲あるピアノ四重奏曲のなかでもっとも人気を得ていた。

第1楽章では、やや不規則なリズムを持つ穏やかな主題がピアノによって奏され、他の楽器と呼応しながら徐々に力強さを増していく。展開部では激情に任せるかのように転調し、ひとつのクライマックスを築く。第2楽章では、弱音器を付けた弦楽器を伴い、ピアノが儂げな主題を奏でる。ピアノの魔術的なアルペジオ、短調の情熱的な旋律といった劇的な要素を散りばめながらも、明るい静けさを保つ。第3楽章のスケルツォでは、牧歌的かつ軽やかな主部に対して、カノンによる対位的なトリオが置かれている。第4楽章はロンド・ソナタ形式で、躍動感あふれる主題には民俗舞曲の影響がみられる。様々な表情・リズムの旋律が緩急自在につながり、終わりを告げるような束の間の静けさを経て、性急なテンポで畳みかけるように曲を閉じる。